

## 心を練る・佐藤一斎の靈言（2016年2月18日靈示） 担当:石田昭 2016年9月24日

- 1 美濃岩村藩主、細井平洲、鈴木正三と共に東海の三先人の一人。言志四録を著した。前世「孔子」ならば、他の人も偉人か？禪僧正三はソクラ特斯的。職業を仏道修行と説いた、VS カルバンの予定説。
- 2 「陽朱陰王」表は幕府側の朱子学、裏では陽明学を教えた。幕末の激震を走らせた一人。
- 3 勉強すればどうなるかを、年齢ごとに説いた。「老いて学べば、死して朽ちず」「自灯明」
- 4 以下靈言：君らは先天性の偉人（前世）を尊重するが、私は「前世」を気にしない。「よく学び、学びの課程で己を鍛え、影響力を人々に与える」その航跡が人生だと思う。「何を学んだかによって変わるもの」と思っている。家康：若い人の前世を明示するのは良くない。
- 5 給料を貰っていたから「頭は朱子学」、でも「心は陽明学」だった。当事文明格差が大きいのは周知。国師的立場で、幕府側か否か、誰か行動を起こさないと、とは思っていた。
- 6 長く生きて、世に名を残すには、学ぶしかない。「学ぶことがその人の人生をも決める」
- 7 美濃の生まれで、諸大名まで教えられたのは「生まれによらず、学徳による智慧」を得たから。「学問の奥まで」達すれば、人を教えられる。何を学ぶか、「実用学」もあるが、不变のものは「人間学」、「古典」。弟子が「どう学問の中核に迫っているか」を見ていた。
- 8 「スマホ」「インターネット」で得られるのは「泡沫の知識」。現代は「知識の質」が落ちているので、まもなく全世界的に没落が始まるだろう。ギリシャの没落、衆愚政治の時代？
- 9 「人工知能」を持ったロボットが、人間を奴隸にする時代が来るだろう。人間は「知能」ではロボットに勝てない。しかし、「学問そのもの」の世界では、そういうことは起らない。
- 10 スマホで情報が得られる「利便さ」は否定しない。だがそれに満足してはならぬ。“奴隸階級”ということ、“ちっちゃな牢獄”の中に入るということ。そこから偉人は一人も出ない。
- 11 「志」なくして学問が成り立つ事はない。何かをきっかけにして「発憤」することが大切。「なぜ私はここにいるのか、何のためにいるのか、何をなすために、この世にいるのか」これを考えるべき。「三食食べるだけ」というのなら、動物とそんなにかわらない。
- 12 利便性だけを追い求め、自分自身を失った人間は「この世を生きやすくすることだけ」を考え、「人間機械説」「快楽説」に向かう。現代の左翼は「この世の命が一番大切」：小室直樹
- 13 今の大学には「中心軸」がない。理系はよく言って「職人養成学校」、文系は「ガラクタの山」、教えているものが「学問」じゃない。宗教法人格取得の前は「人生の大学院」が売り。
- 14 アメリカの民主主義は“犬畜生の自由”だ。“聖人をつくる思想”がなければダメ。
- 15 君らはもう目が曇っていてダメ。昔は人と人が会っただけで、人物の大きさ、重さ、学徳、見識が見えた。「刀を抜くまでもない」という時代だった。「過去世尊重主義」の批判？
- 16 平凡な教師は自分に似た人を評価し、その他を排斥する。「優れた教師は」それの中にある「逸材性」を見抜く。「天下の大ボラ吹き」という逸材性等。「師道の祖」細井平洲
- 17 有名大学と HSU を比べて迷うような人は「平凡人」、東大、京大に受かっても「凡人」です。“奴隸階級”に属する人だ。家族の反対で出家を迷う人への先生の言葉“人間として二流”
- 18 一斎が良しとした人物：マネージメントを必要とする人間、つまり“指示待ち族”は問題外、学問は自分でやるもの。“指示待ち”は真っ直ぐに飛ばない曲がった矢のようなもの。
- 19 徳のある人を中心に、衆星を集め、「北極星」となすような世界を作るべき。「徳」とは？
- 20 玩物喪志、「玩具で遊んでいるうちに本来の志を失ってはならん」ことを教えるべし。
- 21 真に学徳があれば人が求め、仕事はやってくる。磨きが足りないとと思うべし。「準備が整ったときに、天は扉を必ず開く」それを信じることが大切である。ソクラ特斯はどうか？